
死者の晩餐

黒田 早紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死者の晩餐

【Nコード】

N3599A

【作者名】

黒田 早紀

【あらすじ】

死者の世界で行われている晩餐会の招待状を受け取ってしまった主人公、菜々美。そんな主人公が、体験する恐ろしい死の世界を描く物語。

招待状

深夜に開かれる奇妙な晩餐。晩餐の参加者は、この世に存在する事の無い人間。いわゆる、『死者』である。晩餐は明け方まで、続いて行く。

この奇妙な晩餐を、人々は『死者の晩餐』と言う。しかし、この晩餐の様子を知る者は、誰一人としていない。もっとも、『この世に存在する者の中』での話であるが。

そして死者達は、共に晩餐が出来る仲間を探し、人々に招待状を送り続ける ……

四角い白縁の窓から、朝日は容赦無く私の部屋を照りつける。光は、鏡台の上に仰向けで置かれている、黒い手鏡に反射し、天井に丸い模様を描いていた。

鏡台の隣にある、ベッドに横たわっている私は、そんな光の眩しさに目を細めながら、体を起こす。

相変わらず、ショートヘアの私の髪には、頑固な寝グセがいていた。

最早、直す気にもなれない私は、小さくため息をつき、立ち上がる。床の冷たさが、素足を通して私に伝わってきた。私はこの冷たさが、たまらなく好きである。寝ぼけた私に、刺激を与え、すっきりとした気分になさしてくれるからだ。そんなことを思いながら、私は家族の待つリビングへと、足を運んで行った。

「おはよう、菜々美」

降りていくと、母親が、私に語りかけてくれる。私はいつものように『おはよう』と笑顔で返した。いつもと変わらない日常に、私は幸せを感じる。そのため自然と、顔には笑みが浮かんできた。

リビングにあるテーブルには、いつものように目玉焼きと、トーストが乗っている。オレンジ色のカーテンは、まだ開けられておらず、カーテンの隙間から光が漏れていた。

そのため、今この部屋は、電気で照らされている。きっと、朝日が眩しかったのだろう。

「今日も、学校でしょ？ もう高2なんだから、そろそろ勉強も頑張りなさいよ？」

母は、大きくため息をつき、前回のテストで、赤点をとってきた私に強く言う。私は苦笑いをして、その場を誤魔化した。

「全く……それより、あんたに手紙が来てたわよ？ 誰からかしら？」

そう言つて、母は、真つ白い封筒に『横山 菜々美様』とだけ書かれている手紙を私に渡した。シンプルすぎるこの手紙には、住所も、切手も、何も書かれていない。ただ、私の名前だけが、記入されていたのだ。

「何？ これ」

「ラブレターだったりしてね」

眉を顰める私に、母はからかう様に、こんな言葉を吐いた。

私は、『そんな訳ないでしょ？』と、母を怒鳴りつけながらも、内心、少しは期待していたのか、胸が高鳴る。少しの不安と、興味の中、私は白い封筒の封を開けた。

『横山菜々美様、今週の火曜日に開催される、晩餐会に参加しては頂けないでしょうか？ 場所は、ブリネットです。では、お待ちしております。晩餐会にお越し下さる際は、必ず、お帽子を被って来てください。帽子が無い場合は、あなたが危険にさらされます』

「何……これ」

私は、手紙を睨みつけながら、母親に問う。

「完璧なイタズラね。童話じゃあるまいし」

母は飽きた様にため息をつき、ラブレターでなかったのが、相当シヨックだったのか、暗い雰囲気を感じさせながら、キッチンへと足を運んだ。

「童話？ それより、お父さんはどうしたの？」

私は、キッチンに届くよう、大声で母親に喋り掛ける。

「昔、母さんが小さかった頃『死者の晩餐』って絵本があったの。その話と似てたのよ。それとお父さんは、昨日から出張よ」

母もまた、大声で返答してくれた。

私は小さく『なんだ』と呟き、寝グセを直すため、洗面所へと向かい、手紙をゴミ箱の中へと押し込んだ。

物語の結末

「おはよ。菜々美」

学校に到着し、教室に入ると一番に、友人の美奈子が挨拶をしてくれた。

「ああ、おはよ」

そんな友人に私はいつもの調子で返す。

現在の時刻は8時。こんな早い時間から登校して来るのは、学校から家が近い私と美奈子だけであろう。

いつもなら、この時間には、私と美奈子で、楽しくお喋りをして
いるはずなのだが、今日は違う。なぜだか頭から、あの手紙のこ
とが焼きついて離れなかったのである。

イタズラだと分かっていても、印象が強すぎると、なかなか頭か
ら離れないものなのだ。

そのため、美奈子が色々と話掛けていても、私は『うん』などと
アツサリとした返事を返すだけだった。

当然、美奈子はそんな私の態度に疑問を抱く。話始めて、丁度5
分が経とうとした頃、美奈子が私にこんな疑問をぶつけた。

「菜々美、何かあったの？」

自分の話を聞いてくれなくて怒っている、というよりも、私のこ
とを心配してくれている雰囲気を感じられる。

「うん、あのさ、『死者の晩餐』ってお話知ってる？」

そんな美奈子の質問に、私はため息混じりに答えた。

期待はしていないが、もし美奈子が何か知っていたら、と勝手に
思ってしまったのだ。

しかし、美奈子の答えは、予想外に、私の期待に答えてくれた。

「え、知ってるよ？ 深夜に死者が開く晩餐の、招待状が主人公
に届くお話でしょ？」

「知ってるの？」

美奈子は、予想以上に物語に詳しいらしい。話の内容まで知っている。

「け、結末はどうなるの？」

私は、息を飲んで、美奈子に問い掛ける。もし、話の結末が悪い結果であつたら、私にも悪いことが怒るような気がしてならなかったからである。

「それがね、結末は、謎なの」

「謎？」

美奈子は、不満そうに眉を顰めて続けた。

「物語は、主人公は死の晩餐の世界へと踏み入れて、そこで終わる」

私は美奈子の話の意味がよく理解できずに、口を半開きにして、『何それ』と答える。

「私も、そう言いたいよ」

美奈子は大きくため息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3599a/>

死者の晩餐

2010年10月31日04時13分発行